

「からし種一粒ほどの信仰」

申命記

第32章 3節～6節

マタイによる福音書

第17章 14節～27節

説教

岡村 恒 牧師

「もし、からし種一粒信仰があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』と言えば、移るであろう。このように、あなたがたにできない事は何も無いであろう。」(20節)これは、信じていれば何もできないことがなくなるということではありませんが、それでいてなお、絶対にあり得ないこと、あってはならないことが起こるといふことなのです。神の力を知って、神の力をまとして生きるということ、あり得ないことが起こるような世界を生きるということでもあるのです。

主イエスが山から下りられると(9節)、ご自身が「不信仰な、曲がった時代」(17節)とおっしゃる世に直面されることとなります。当時は、悪霊にとりつかれた者がかかるとされていた病気に苦しんでいる子の親が、自分の子をなおしてほしいと頼んできたのですが、主イエスの弟子たちにはなおすことができませんでした(14節～16節)。このことをお聞きになった主イエスの発せられた言葉が「ああ、なんとという不信仰な、曲がった時代であろう」という言葉だったので。「いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまであなたがたに我慢ができませんか。」とおっしゃいます。(17節)

主イエスは、病気の子どもをご自分のところに連れてこさせ、おしかりになると、悪霊はその子から出て行き、その子をいやされます(18節)。弟子たちは主イエスのもとにきて、「わたしたちは、どうして悪霊を追い出せなかったのですか」と尋ねます(19節)。このとき主イエスは答えて言われます。「あなたがたの信仰が足りないからである」と(20節)。冒頭に示しました「からし種一粒ほどの信仰」というときの「からし種」とは本当にごくごく小さいものたえです。それが一粒ほどあるだけで、「あなたがたにできない事は、何も無いであろう。」(20節)とおっしゃるのです。

弟子たちは、主イエスに付き従っているようであるが、実は、疑い半分、期待半分というような、いわば中途半端な心境で主イエスに仕えようとしていたのです。そのような心境にいる者たちは、主イエスの言葉によれば、「からし種一粒ほどの信仰」もないということになります。また、その者たちは、「不信仰な、曲がった時代」、主イエスからご覧になって、「我慢ができません」ような時代に生きる者たちでもあるのです。

しかし、これは、今の時代に生きる私たち自身の姿でもあります。愛よりにくしみがあられ、隣り人を愛することもできず、隣り人に仕えて生きることもできず、また、神に一切をゆだねて、神の力だけを信じて生きるということのできない私たちの姿でもあるのです。

主イエスの弟子たちは、病気の子どもをなおすように頼まれたとき、自分たちでできるというように思い違いをしていました。弟子たちは、手段や方法をまちがえたのではなく、信仰が足りなかったのです。神への信頼に全体重をかけて生きるということができていなかったのです。神の力が注ぎ入れられなければ、また、神との強いむすびつき、すなわち信仰がなければ、悪霊を追い出すことはできないのです。

信仰とは、人間の力では望み得ないことがかなえられると確信することです。まだ見ていないこと、あり得ないことが起こると信じる、いやもう実現していると確信することなのです。そして、信仰は、私たちが発見するものではなく、神の霊によって与えられるものなのです。

あり得ないことが起こるといふとき、その中でも特に最もあり得ないこととは何でしょうか。それは、罪人が赦され、愛されることです。滅ぶべき者が神の子とされるということです。罪人とは、神から離れ、自分自身が自分の人生の主であるかのように生きる者のことです。神への信頼のうちに生きることでできない者のことです。そのような者に救いが与えられるということは、山が海に移ることよりももっと不可能なことであるはずですが、しかし、「からし種一粒ほどの信仰」があれば、私たちの救いは現実となるのです。

神から離れ、敵対していた私たちは自分の力だけではその罪を贖うことができません。しかし、神が私たちを創られ、私たちを愛してくださっていること、神の愛とは私たちの救いのために御子イエスを身代わりにしてもよいとお考えになるほどのものであること、主イエスが十字架にかけられ、死んでくださることによって、私たちの罪の赦しの代償となってくださったこと。このことを信じる者は神の霊によって赦され、救われるのです。そのとき私たちは神のものたされ、神の心に「かなう者」(17章5節)とされるのです。

(記 説教要約奉仕者)